
好きになれ。

やまの栗栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きになれ。

【Zマーク】

N1063R

【作者名】

やまの栗栖

【あらすじ】

あまねはわたしの神様だ。
女のお話。

桜の木の下で出会いった少年と少

一本桜の下

「あまねはわたしにとつて神様だ」

あまねと出会ったのは高校の入学式。式典を終えて部活動の見学に行く途中での出来事。

高校入学祝に母から買つてもらつた真新しい腕時計に視線を落とすと見学の時間までまだ30分以上あって、わたしは何気なしに寄り道をすることにした。

わたしの入学した高校は県内でも有名な進学校。文武両道がモットーの由緒正しい高校だ。その中でもわたしが入部を考えているテニス部は学内一番人気で実力者が揃う部活であった。その部活が行われるテニスコートは校舎から最も離れた最西端に位置する。

何処に行つて時間を潰そつか、そう考えているとひらりひらりと風に乗つて小さな花びらが目の前をゆっくりと通り過ぎ、そのまま地面に吸い込まれるように落ちて行つた。

腰を曲げて足元に落ちたそれを拾い上げると小さな可愛らしきピンク色の花びら。

「そういえば…校門の方に咲いてたっけ」

登校する際に視界の片隅に大きな桜の木があつたのを確認した気がする。それを思い出すと行先は決まつたとばかりにわたしの足はその方向へと向かっていた。

今朝の記憶を辿るまま歩いていくも実際桜の木のふもとに到着する

のには結構時間がかかった。朝見えたときにはかなり遠巻きから見たらしい。実際に咲いていたのはテニスコートとは正反対、最東端だつた。大量に咲いているかと思えば実際にはたつたの一本だつたけど、一本の桜の木は満開に咲き誇り辺りをパステルピンクに見事に染め上げている。

校舎からも部活棟からも離れているこの場所にわたし以外の人は見当たらない。正門も離れているし進んでこんな外れに来る人などいないのだろう。

わたしは桜の木の下に近付くと幹に背を預けゆっくりと腰を下ろした。見上げれば沢山の花をつけた桜。視線を落とすと散った桜の花びら達がまるで絨毯のように土を覆い隠している。

落ち着く光景。気持ちいい。わたしは気付かぬうちに瞼を閉じていた。

遠くで色々な声がする。友人と楽しくおしゃべりをしながら帰宅する声。金属バットにボールが当たり突き抜けるような音。外周を回る生徒たちの掛け声。

声？さっきまではみんなに静かだったのに？

はつとして私は目を開けた。時計を見ると先ほどから30分近く経つてしまっていた。いつの間にか眠っていてしまったらしい。

その事実に驚いて勢いよく立ち上がる。急いで行かなくては思つて走り出そうとしてのだが、思わず動きが止まる。

わたしの目に入ってきたもの。

わたしが睡眠のお世話になつた桜の木とは違う、一本桜の片割れの木の下。

桜が日の日差しをかなり遮っているにも関わらずきらきらと天使の輪が綺麗に光を纏つているミルクティ色の髪。穏やかに吹く風にさらりと音が聞こえるかのように揺れてい。すらりと伸びた手足はこの学校の制服に包まれていて、それがとてもよく似合っていた。少し長めの前髪の下の双眸。茶掛かったそれはじつとわたしを見て

いた。

吸い込まれてしまいそうになる瞳。わたしが見とれてしまっていたのに気が付いたのであらうか、その瞳は緩やかに細められにつりと笑みが作られた。

舞い散る桜の花びらの中、優しく微笑む彼。

何て優くて脆くて…美しいのだろうと。

彼はこの一本桜に代々住まう桜の精なんじやないかと思つた。

「…仮入！行かないと…」

ふと再度腕時計を見ると当たり前なのが先ほど見た時よりも更に時間が進んでしまつていて。

時間が過ぎてしまつていて、だが目の前の桜の精のような彼も気になる。どうしようかと迷つていて、彼は焦るわたしを見て口元に手を当てて笑つていた。

その笑顔もまるで花開く瞬間のよつた可憐さがあつてまた見とれてしまいそうになつたのだが。

「早く行つた方がいいよ。いつてらっしゃい」

透き通つた、洗練されたボーアソプラノ。

たつたの一言。それだけなのにわたしの頭は彼に支配されるよつこ動かなくなる。

それでも彼が掛けてくれた言葉の通りにしなくてはいけないと意思をしつかりと持ち走り出す。

何だかとても足が重い。離れるのが嫌だとでも言いたいのだろうか、わたしの足は。少し離れてから振り返つてみたけれど、彼の姿はもうそこにはなかつた。

桜の精は、消えてしまつのも早いのと思つた。

わたしとテニスとあまね

結局わたしがテニスコートに辿り着いたのは仮入部が始まる時間より10分以上遅れてからだった。

初日の見学からいきなり遅刻だなんてどんでもない！などと怒られることはなく、顧問の先生も先輩方もここにことわたしを迎えてくれた。コートを見れば打ち合う上級生。確かに評判通り上手い。

でも、見学とはいえ初日に遅刻してくるような一年を奢めるわけでもなく優しく迎えてしまう生ぬるい微温湯に浸かっているような部活。

わたしは、ここじゃ強くなれないなと思つてしまつた。

わたしは小学校・中学校は父親の仕事の都合で転校ばかりの生活を繰り返していく、部活には入ったことがなかった。それでもテニスを始めたのは父と母が元々テニスを好きで、幼い頃から一緒にコートに連れて行つて貰つていたからだ。

両親がコートで打ち合つている時に端っこの方でラケットとボールを使って一人遊び。時には両親が友人達とテニスをすることもあるて、そういう時には大抵同じ年くらいの子どもも一緒にやつてくるから、その子達と簡単なラリー形式などをして遊んだ時もあった。本格的にテニスをやってみたいと思ったのは小学一年生になつた頃あたり。

その事を両親に告げたら転校ばかりさせてしまつていてのを負い目に感じてしまつていたらしく、全面的に協力してくれた。

もちろん、ウェアもラケットも真新しいわたし専用のものを購入してくれて、何処に転校しても近くにあるテニスクラブに入れてレッスンを受けさせてくれた。

わたしは運動神経が特別良いというわけではないのだがテニスはと

ても向いていたらしい。何処のクラブに行つてもコーチに才能があると褒められたり、同じ年くらいの中では誰一人として試合形式で負けたことなんかなかつた。

公式の試合に出てみればいいと何度も色んな人に勧められたりもしたけれどそれだけはやらなかつた。
どうせわたしに勝てる子どもなんかいない。そんな妙な自信があつたからだ。

現にいま見ている先輩達の試合形式での練習も甘つちやういな、なんて思つてしまつ。やはり入部はやめてまた近くのクラブに通つこうにしよう…、そう考えていたのだが。

「天音くん！ 来てくれたのか！」

先ほどまで見学者に日程の説明やらをしていたと思われる顧問の先生の声が後ろから聞こえた。声だけ聞く限りでもかなり興奮しているように聞こえる。

誰が来ようとわたしには別に関係ない。

さつさと帰つて近辺にあるクラブでも調べなくてはと思つていたのだが、後に続いた声にはつと振り返つた。

「ほんにちは、先生。見学にだけ来させて貰いました」

耳触りの良い心地良いボーカルソプラノ。

振り返つた先にいたのは顧問の先生に笑みを向ける桜の精のような少年だった。

「やつぱり入部する気はないのかい？」

「ごめんなさい。入部はやつぱりできないです。ただ、こうやって時々見学に来たりしてもいいですか？」

「天音くんなら大歓迎だよ！」

その会話の様子を不思議そうに見ていた周りの生徒たちの視線に先生が気付く。

「ああ、彼は天音、天音光くん。中学テニス界の中で最も注目されていた優れた選手なんだよ。」

先生大袈裟すぎですよ、と桜の精もとい天音は笑った。彼はただ普通に笑つただけなのだろうけどその笑顔はわたしが今まで出会った誰よりも美しく儂いもので。周囲にいた生徒たちも私と同じことを思つたに違ひない。皆が天音に見惚れていた。

しなやかでしたたかなテニス

あまねひかる。

美しい容姿にぴったりの美しい名前。天から聞こえる音の光。天音光。

わたしは無意識のうちに今知つたばかりの彼の名前を彼の名前を何度も何度も頭の中で繰り返していた。まるで知りたくて知りたくて仕方がなかつた初めての言葉を覚えた子どものように。

ただ先生が言つた言葉。

「中学テニス界の中で最も注目されていた優れた選手なんだよ。」

わたしは公式の大会に出たことがなかつたから中学のテニス界は全く知らないのだけれど、この名門なテニス部の顧問が名を知つているような選手ということとは相当の実力者なのだろうか。

すらりと細く伸びた肢体に優しそうな瞳。白く透き通つてしまいそうな肌は全く日焼けなどとは無縁だと物語つている。

それがテニス？運動自体ちゃんとできるか怪しいことさえ誰もが思つてしまいそうなのに？現に周りに集まつて生徒たちだつて外見こそは見とれているもののテニスに関しては全く関心を持つていないうに見える。

気になる。彼は本当に強い？強いなら何故この部活に入らない？気になる気になる気になる。

「わたしと一回打つてくれない？」

わたしは気持ちを抑えられなかつた。

もともと辛抱強い方じゅないという自覚はあつたけれど、こんなに

も彼が、彼のテニスが気になるのだ。黙つていることなんてできなかつた。

遅刻してきたことに加え今まで一言も発言しないでただ傍観していただけのわたしがいきなり、しかもかなり無茶苦茶な挑戦的な発言をしたことに顧問の先生をはじめ、その場にいた皆が驚いて私を見た。その視線に気づいて私は初めて随分失礼なことをしてしまったのかと思つたけれど、声をかけられた当の彼、あまねは一瞬驚いた表情をしたものの直ぐに目を緩く細めにこやかに笑つた。

「…一回だけならいいよ」

耳触りの良いその声が了承を返したとき誰よりも驚いたのは顧問の先生だった。何故そんなに驚いたのか聞こうかと思ったけど、その質問はあまねによつて遮られた。

「僕は天音、天音光。君は？」

そう言つて近くにいる生徒からラケットを借りて先に目の前の一一番近いコートへと足を進める。わたしも慌てて自分のラケットを出してコートに入った。

あまねとネットを挟んでコートに立つと、急に今まで感じたこともないような緊張感に襲われた。全身の毛が逆立つような張りつめた空氣。あまねは変わらずニコニコと笑みを浮かべているというのに。ただ不思議なのはその緊張感が少しも辛いものではなくそれどころか心地が良いくらいだったこと。

「湊ゆうき

「綺麗な名前だね」

君によく似合つてゐる、その言葉と共にあまねの手からボールが離

れた。

アンダーサーブからの一球。アンダーだなんて、女子だからってわたしを舐めているのかと思つたりもしたがその球をラケットに受けた瞬間にそんな考えは吹き飛んだ。

思つていたよりもずっと重い！ フォアハンドで返せる球だったので片手でラケットを握つていたのだが慌てて左手も添え何とか打ち返した。

あの細腕の何処からこんな重さのある球が打てるのか疑問に思つていると直ぐに球が返つてくる。サイドラインぎりぎりの際どいコートス。

何とか追いついて返す。わたしだつて伊達にテニスばかりやってきたわけじゃない。簡単に負けてたまるか。そんな思いも込めて負けじとショートクロスに打球を返す。

そう簡単に返せる球ではない…はずなのに。あまねはまるで飛んでいるかのような軽やかなステップでいとも簡単に返球し前に詰めてきた。

シングルスで前に出てくるとこうじとは勝負に出てきたといつゝことに近い。それなら得意のストレートで抜いてやる！

意気込んで打ち込んだわたしの全力の球はあまねの鮮やかなボレーによつて止められ、わたしはそれに対処することができず、空しくコートの上でツーバウンドし、一球勝負はあまねの完全勝利に終わつた。

なんていう、テニス。

なんてしたたかでしなやかなテニス。

今までこんなテニスをする人はいだらうか？

ゞくゞくとやけに鼓動が大きく聞こえる。気持ちがざわざわして落ち着かない。

たくさんの人に囲まれて笑顔を見せているあまね。

あまねから目が離せなかつた。

今日出会つたばかりなのに、まるでわたしの頭の中はあまねでいっぱいになってしまったみたいに。

もつと知りたい

「湊…さんだっけ？すじく上手だね。入部希望でいいんだよね？」

わたしとあまねの一本勝負が終わり一番に声を掛けってきたのは先生だった。あまねのボレーによつてラリーが終わつてからそんなに時間は経つていない、ほんの数分のことだ。あまねを見つめていたわたしにはかなり時間が経過していたように思えたのだが、コート脇に立つ少し古びた時計を見てみても針は先ほどから少ししか動いていなかつた。

確かにはじめは入部するつもりで来た。だけどこの部活の雰囲気を見て入部を辞めよつと考えていた。そしてあまねが来た。打ち合つた。完敗した。あまねは入部しないといつ。

考えるまでもない。わたしにはこの部活に入るという選択肢は全くと言つていよいほど残つていなかつた。

返事をなかなか返さないわたしを訝しげに見下ろす先生の後ろに借りたラケットを返しその場を去るあまねの姿が見えた。

入学式後のクラスのオリエンテーションの時、あまねの姿は見えなかつた。顔見知りだつた訳ではないから意図的に探したりはしていないけど、あんなに整つた美しい少年がいたら印象には残つているはずだ。わたしと同じクラスではないということは今会話を交わさないと明日以降なかなか会えないかもしれない。何たつてこの学校は大きな進学校だ。1学年だけでもクラスはたくさんある。探すのだつて一苦労してしまうかもしれない。

「わたし、入部しません。ごめんなさい。」

簡潔に答えを返し、失礼しますと最低限の言葉を付け加えてわたし

はその場を後にした。周りからは入部に来たのではないかと声が上がつていただけど全部無視して駆け出した。あまねを追いかけるために。

急いで追いかけた甲斐もあつてあまねを発見したのはテニスコートからそんなに離れていない、校門のすぐ傍だった。

校門付近には下校途中に生徒たちが沢山いたけれど、わたしはその中に歩くあまねをすぐに見つけられた。

春風にさらさらとミルクティ色の髪の毛が揺れて、それを細く纖細な指が耳横で押さえる。そんな特に珍しくもない仕草を見た瞬間に後姿でもわたしにはそれがあまねだと確信した。

「……湊さん？」

あまね！と声を掛けるとその人物は足を止めゆっくりと振り返った。ボーアソプラノが不思議そうに先程教えたばかりのわたしの声を口にする。

初めてあまねの口から私の名前が発せられた瞬間、ぶわっと大きく風が吹いた。校門から離れたところに咲く桜の花を運んで。わたしとあまねの間に花びらが通り抜ける。

「どうしたの？仮入部、まだ途中なんじゃない？」
「わたし、入部辞めた」

仮入部の途中で抜けてきてしまったのだと思つたであらうあまねは不思議そうにこちらを見ていたから、まずはその疑問を取り除くべく言つ。

どうしてと言いたげな表情に理由をすぐに述べようと思つたけど、校門の前の人通りの多い場所で長い話をする気にもなれず、あまね

に少し時間はあるかと確認を取つてからわたしたちは場所を移動した。

校門から少し離れた場所にある、あの一本桜の下に。

わたしたちはついついさつき、一時間経つか経たないかくらい前に初めて出会った場所に腰を下ろした。一本桜のそれぞれの下に。その距離は近くもなく遠くもなく、丁度いい。お互いが精一杯手を伸ばしてようやく手を繋ぐことが出来るくらいの距離。

「わたし、あの部活にいても強くなれない気がしたから、辞めた。」「どうしてそう思つの？」

「あまねが入部しないから」

校門前で中断した理由を口にするがあまねはすぐに疑問形で返してきた。わたしもそれに間髪入れずに答えを返す。

あまねが入部しないから。

これには流石にあまねも驚いたらしく目を大きく見開きこちらを見ていた。ぱちぱちと瞬きをする度に長いまつげの影が動く。少し困惑気味の様子でさえ悩ましく麗しい。辺りを舞い踊る桜の効果もありその姿はやはり桜の精のようだつた。

「あんなに上手いのに、どうして入らないの？やりたくないの？自分よりも強い人がいなさうだから？どうして？」

気になることが多いので、自分でも驚くくらいにわたしは質問を口にしていた。それこそあまねに返答の暇を『えないくらいに。遠慮も配慮も無しなわたしにも起こることはせず、あまねはただ困つたよつて笑っていた。

「やうこりのじやないんだよ」

「じやあどうして?」

「どりしてだらり?」

小首を傾げて悪戯っぽく笑うあまね。

誤魔化されたとわかつたのだが腹は立たなかつた。あまねの笑顔を見ると、これ以上困らせるよつなことは言いたくなことさえ思つてしまつ。

こんなに他人のことを知りたくなつたのは初めて。それなのに困らせるくらになら知らなくてもいとと思つてゐる矛盾。

「じゃあ…ときでいいから…わたしと打つてくれる?」

自分から人にテニスをしてほしいと頼むのは初めてのことだつた。今までは頼まれたらやつてあげる、付き合つてあげる。一回限りのドライな関係でしか人と付き合つていなかつたのに。それはテニスに限らず、人間関係的な面でも。

別に誰とも深く関わらなくとも生きていけるし何も困るJとはないと思つていた、いや、今もその考えは変わらないけど。何故だろ?。

あまねは、あまねだけは違う。

あまねだけはこのままさようならなんて出来ないと思つてしまつた。もつと知りたい、あまねのJと。仲良くなりたい、あまねと。

ぐつと唇を噛み締めてあまねの返答を待つ。ただ一言、YESかNOかの言葉を待つてゐるだけなのにこんなにドキドキするなんて。あまねはまた困つたように笑つてゐた。少し悩んでいるようにも見えたけど、小さく頷いて、いいよ、と微笑んだ。

「ホントときどきになつちやうけど…それでもいいかな?」

「構わない、あまねが打ってくれるなら」

「ありがとう、湊さん」

お礼を言つのはわたしの方なのに、あまねは丁寧に感謝の言葉を述べるとまた小首を傾げて笑つた。花が綻ぶように柔らかく。

「湊でいいよ。わたしもあまねって呼び捨てるから、あまねもそうして」

お願ひというよりも半ば強制的に。親しくない人に呼び捨てにされるのは今までのわたしなら絶対に気に入らないはずなのに、あまねには何故か、さん、なんて付けてほしくないと思つた。

「湊」

わたしの要求通りあまねが名前を口にする。

その瞬間ぶわっと大きく風が吹いた。さっき校門で感じたものよりももつともっと大きな春風。桜の花びら達が渦を巻くように舞つた。まるでわたしとあまねを飲み込んでしまうかのように。鼓動が静まらない。このままここに倒れてしまつのではないかとさえ思つた。

初めて感じる恐怖のような感覚に思わず強く目を瞑る。
ざわざわと騒ぐ風の音がゆっくりと静かになつていいく。少ししてようやくその音が消え、わたしは恐る恐る目を開いた。

ぼんやりと映る視界は次第にはっきりと辺りをとらえる。ピンク色の花びらが作つた絨毯。たくさんのお花が散つてもなお満開に咲き誇る桜の大樹。そしてその下で微笑みを浮かべて立つ少年。その瞳はじつとこちらを見つめていた。

視線が合つた瞬間、先ほど感じていた恐怖のような感覚が嘘のようになつた。相変わらず鼓動はうるさいからこちで響いているけど。

わたしは、あまね、と小さく呟いた。ほとんど無意識に名前を呟いていた。

その様子を見てかあまねは目を緩く細めてこいつと笑った。

桜、花びら、アルカイックスマイル。

わたしの生きる世界が今までとまるで色が変わってしまったみたいに明るく見えた。

高校の入学式、一本桜の下。

これが、わたしとあまねの出合いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063r/>

好きになれ。

2011年10月8日19時13分発行